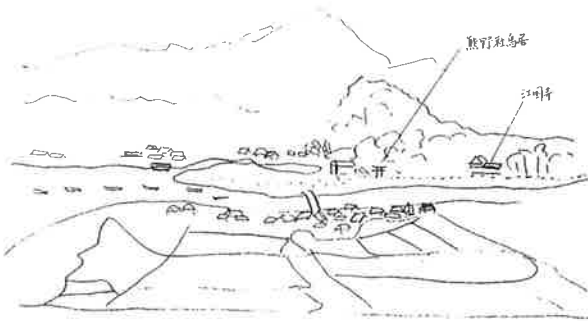


今は幻 柏江港

中 林 幸 夫

（会員・佐伯市長島町）



菜の花の風を受けて、津志河内橋を渡り、堅田川の右

岸に沿って県道長良・木立線を上って行くと、誰もが

知っている童謡の「小鮒（こぶな）釣りりしかの川」や「夕

焼け小焼けで日が暮れて」などの歌詞を思い出し、思わ

ず歌いたくなるような風景に出会う。

その道沿いに白壁の続く静かなたたずまいの寺江国寺

がある。入口には、教育委員会の建てた案内板があり、

「柏江の文化財」として、江国寺の創建のことと、柏江

は江戸時代天領で、産物の積み出し、上方文物の輸入の

交易港として栄え、堅田郷の中心であったと説明してい

る。現在の寺の前を流れる堅田川は、幅約三〇メートル

で、葦が茂り、「港らしい」面影は何処にもない。

柏江のことが知りたくて、『佐伯史談』等を調べてい

たら、

佐伯藩時代の記録に見える津志河内（第一三三号）

佐 脇 貫 一

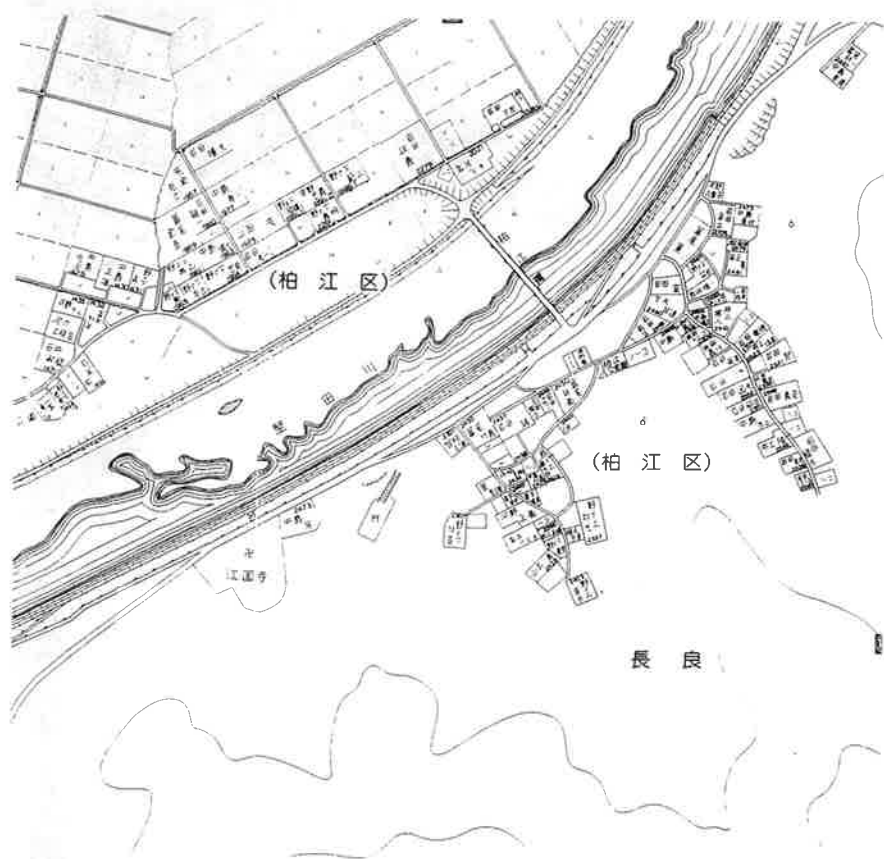
佐伯藩主の領内巡見（第一四一号） 古藤田 太

柏江の清流に臨んで嘉吉の昔を偲ぶ（第一四五号）

高 木 嘉 吉

柏江物語（第一四六号） 岩 田 トヨ子

柏江区の地図



正田庄屋屋敷(第一四六号)・同文書(第一五一号)

佐藤 藤 巧

等に堅田付近のことが書かれていた。

これらを拝見すると、佐伯藩三代目の家督問題で、初代毛利高政の異母弟に当たたる森九郎左衛門(吉安)と、二歳の高尚を推す家老間で争いが起り、敗れた吉安は、知行二千石を幕府に返上したとあった。

その後、寛永十一年(一六三四)に幕府直轄地天領が出来、明治まで続いている。天領の範囲は、床木と、堅田の汐月・柏江・津志河内・泥谷・波越・石打・西野・府坂・それに棚野の一〇か村となっている。しかし、何故か、文章等にも柏江のこと、柏江港のことがはつきりしていない。

慶長六年(一六〇二)、毛利高政が入封した時同行した弟の吉安は二千石を受けて、柏江の野中に城戸を造り居住して、床木・堅田等一〇か村を支配したと記録はあるが、柏江の野中は何処か、城戸・屋敷は何処にあったのかと、一般の地図を調べてみても、何処にも野中の地名はなかった。

そこで、「ゼンリン」の住宅地図で柏江地区付近を調べていたら、柏江区に、野下・野々下・野々上等の姓が点在しているのに気がついた。吉安が野中に居を構えていたため、付近の地名は野中を中心にして、野々上・野々下と呼ばれていたものが、明治時代に入って苗字を付けるにあたり、地名を姓氏に使用したと考えられる。そのように考えると、野中は柏江の中央付近ということになる。

『佐伯史談』(第一四六号)に岩田トヨ子氏が柏江港にふれて

土地は天領 公儀の支配

藩の御城下 佐伯の町を

一里へだつる 柏江港

諸国諸州の 船集りて

朝の入荷や 夕の積荷

波止にゃ貨物の 山積みあげて

と、盆踊りの口説を説明し、柏江には千石船が二〇艘ぐらいいたと、船名の実名を挙げられている。熊野権現には、今も住福丸・住寿丸の木札が掛かっている。

何故このように栄えた港の記録が少ないのだろうか。

書物等にある記録を書き出し、年代別に表にしてみると次のようになった。

西 暦 年 号

一四四一 嘉吉 元年 大内勢、豊後に侵入、兵船三百

余隻で柏江に上陸

一六〇一 慶長 六年 毛利高政佐伯に入封、二万石

同 同 森吉安、柏江の野中に城戸を構

える(二千石)

一六二八 寛永 五年 高政没、二代高成継ぐ

一六三二 同 九年 二代高成急死、家督争い起る

一六三三 同 一〇年 三代を高尚が継ぐ(高成の長男

二歳)

一六三四 同 一一年 吉安、領地を幕府に返上、床木

堅田一〇か村天領となる

一六四五 正保 二年 江国寺境内に吉安の墓所をつく

る(一六四〇 吉安江戸で没)

一六六〇 万治 三年 鬼州和尚が柏江に江国寺創建

一六六四 寛文 四年 御預公領の佐伯の内御蔵米二百

三石六斗五升七合を公儀に差出す

日田代官山田清左衛門、竹内三郎

兵衛に管理させる

一六六六 寛文 六年 堅田の柏江村の庄屋六郎兵衛が

水路の争いで捕まり息子六大夫が

早船で江戸に行き幕府に直訴

一七〇四 元禄一六年 幕府大型船建造禁止

一七五五 宝暦 五年 佐伯藩から勝手に瓦屋根にして

はならぬ達示

一八五五 安永 四年 藩主(高丘) 預所巡見、益田金

兵衛以下七三名

一七八三 天明 三年 幕府は公領一〇か村を佐伯藩

(八代高標)に預け年貢米の徴収

にあたらせた

一七九二 寛政 四年 預所一〇か村総代床木村善右衛

門こと安太江戸に出て出訴、天明

三年より御預所に仰付けられこれ

より百姓困窮している、元どおり

代官(日田)に復していただきた

く訴える、幕府御預所頭取宮本又

右衛門に呼出

一八〇〇 寛政一二年 佐伯藩、脱け売禁止、狩生村百

姓茂右衛門、煎鼠を長崎に売る

一八〇四 文化 元年 江国寺六代箭山和尚が再興

一八〇五 同 二年 藩主（高誠）預所巡見、関谷隼

人以下八一名

一八一〇 同 七年 在浦の戸数調べ（柏江見当たらず）

弾正以下六八名

一八一五 同 一二年 藩主（高翰）預所巡見、佐久間

三年とあり

一八一八 文政 元年 熊野権現、柏江春景之図に文政

三年とあり

一八二〇 同 三年 熊野権現の石碑に文政三年とあり

部以下七三名

一八四〇 天保一〇年 藩主（高泰）預所巡見、戸倉織

部以下七三名

追放

一七〇五 宝永 二年 家老沼兵太夫免職追放

一七二〇 享保 五年 家老戸倉惟重、重罪により領外

追放

家老益田六郎左衛門出奔

一七二八 同 一三年 家老岩本平左衛門罪あり免職

一七三七 元文 二年 家老益田平馬罪あり領外追放

表を見ていると、佐伯藩と天領の間には、争いごとが

絶えなかったようである。想像では、テレビの「水戸黄

門」の筋書きのようなことが幾つもあったように何うこ

とが出来る。

記録にある、床木の庄屋、善右衛門の幕府への出訴、

柏江の庄屋の息子六郎兵衛の幕府への直訴を見ると、当

時の百姓は、困窮した生活を強いられていたようである。

悪代官に天領の庄屋や百姓が泣かされた思いが伝わっ

てくる。

正田庄屋文書を柏江を知るために読むと、昔の庄屋は

人望が厚く、百姓も善良で、生活の厳しさに耐えている。

現代の市町村長には真似が出来ない。

柏江港の手掛かりはと思い、柏江を散策した処、川の

近くに石の鳥居があり、そこから険しい石段を百段ほど

登りつめた所に神殿があり、熊野権現神社となっていた。

参拝のため、社殿に入ると、古い額や木札が掛っていた。

参拝のため、社殿に入ると、古い額や木札が掛っていた。

薄暗い社殿の中では、はつきり読めなかったが、長年の雨水に汚れている一枚の額縁が気になったので写真に撮り、調べた処、「文政元年、柏江邑春景之図」と読めた。

文政元年といえば、今から百七十五年前であり、絵画はまぎれもなく柏江の景色で、現在の地図とつき合わせて見ると、道路や護岸の改修で河川の状況等は変わっているが、図の中に「江国寺」「熊野権現の石の鳥居」が正確に描かれており、鳥居の直ぐ横に大きな瓦屋根の倉らしきものがあり、そこへ砂浜伝いに荷揚げされた物が、人々によって運ばれているように見える。その倉の裏側に瓦屋根数棟が点在することから、野中の吉安屋敷があった所ではなからうか。そして、砂浜から対岸へ柏江橋が架かっており、部落の各戸の屋根は茅葺きであるが、一軒だけ瓦屋があり、これが当時の庄屋屋敷ではと思われる。

文化七年の伊能忠敬の測量日記に

柏江村庄屋、雅五郎

とあることから、庄屋の家であろう。また、柏江橋から下流が港で、岸には大型船や小型船が数隻見える。この絵図を見る限り、正確性があることから、年代の真偽

は別として貴重な資料である。

書物を見ていると、天領は佐伯藩にとって何かと面倒なものであったようで、記録の中にも柏江のことは、外しているように思われる。

年表を作ってみて、「正保二年（一六四五）江国寺境内に吉安の墓所をつくる（二豊小藩物語に記載）」とあるが、江国寺は養賢寺の鬼州和尚が、万治三年（一六六〇）に創建（佐伯志に記載）したのであれば、墓所の方が寺より先ではないのだろうか。墓の方が「先」が自然的で、吉安のたたりでも恐れて、佐伯藩が寺を造らせた可能性もある。

天領柏江港が一時期であるにしろ繁栄を見たことは事実で、廻船記録や吉安関係資料はどこかにあるように思われて仕方がない。小藩で多数の武士を抱えた佐伯藩より武士が居なくて、自由交易の港が栄えたことは明白で、今日の日本の繁栄に似ているように思われる。

春景之図には、桜が咲き、菜の花が咲き、文政のよき時代がある。天領の春である。額縁が昔と今の春を語る

地区の方に額縁等の調査、保存をと本稿を書く。